

写本チベット訳『八千頌般若経』 の翻訳年代について

川 合 務

I. 前稿において¹⁾、私は東洋文庫所蔵の写本の内容を検討してみたが、その結果、この写本は『大般若経第四会』と梵本系との間に位置づけられること、つまり、現行のチベット訳刊本より古い内容を持つ写本である、と推定した。しかし、その写本の奥書については、刊本とほとんど同じ翻訳者、改訂者を並べているので疑問が残っている。

ところで、現在、チベット訳写本はこの他に、東京大学文学部（多田等観氏将来）と大谷大学図書館（能海寛氏将来）とに各々1本ずつある。

東大写本は完本で、内容は、東洋文庫写本との対照の結果、同一原本の転写と判断される。東洋文庫写本の場合、前稿においては、第1、第8、第16の3章についてA〈梵本系以前である箇所〉B〈梵本系にのみほぼ一致する箇所〉、第22章についてA'〈『第四会』にのみほぼ一致する箇所〉B'〈梵本系にのみほぼ一致する箇所〉の各々2例を、第26章については1例を掲げたが、これを東大写本と対照してみると、次のようになる。第1章A=9b2, B=19b4~20a1, 第8章A=120b3, B=121b7, 第16章A=186b6, B=188a4~6, 第22章A'=235a1, B'=237a5~b3, 第26章=256b2~5. しかし、東大写本に奥書が存在しない点から見ると、東洋文庫写本には、本来、奥書はなく、後に刊本の『八千頌般若経』とほとんど同じ奥書が付加されたものと思われる。それでは、この両写本の原本はいつ頃翻訳されたのか、その年代を大谷写本を用いて推定してみたい。

II. 大谷写本 {大谷蔵外 No. 12750 (1), (2)} は第13巻から2巻に分かれ、二葉程欠落しているが、ほぼ完本である。その内容を東大写本と同様に対照してみると、第1章A=(Vol.) I. 13a2, B=26a6~26b6, 第8章A=155a7, B=156b6~7, 第16章A=II. 36b2, B=38b1~4, 第22章A'=99b2, B'=102a6~b6, のように、他の2写本と一致するが、第26章の箇所(II. 127a3~6)だけが2写本と異なり、刊本と一致している。そこで、さらに第2、第4、第9、第13、第18、第19、第21、第27、第28の9章について対照してみた結果、梵文原典の相違を想定しなければならない程の違いは認められなかった。第26章の箇所は問題とし

て残るが、大谷写本も他の2写本と同様、同一の梵文原典、すなわち、『第四会』と梵本系との中間に位置づけられる梵文原典を翻訳したものと見てよいであろう。ところで、大谷写本には次の奥書がある。

rGya gar gyi mkhan po Dharma śi la dañ lo tsa ba ban dhe Bai ro tsa na ra kśi ta dañ | shañ Śag kya pra ba la stsogs pas shus nas gtan la phabs pa || (II. 200a4~5) [インドの師 Dharmasīla と翻訳官僧 Vairocanarakṣita とシャン Śākyaprabha 等が校閲して確認したもの。]

まず、この奥書の信憑性についてみると、刊本の『八千頌般若経』は、その内容から見て、新しい梵文原典を翻訳及び改訂したものであるが、その奥書の最初に出るチベット人の Dharmatāśīla は814年の *sGa sbyor bam po gñis pa* の編纂に関与し、共訳者から見ても Khri lde sroñ brtsan 代の人物であるので、古い梵文原典を翻訳或は改訂したものの奥書に、後に見るように Khri sroñ lde brtsan 代の人物と思われる Vairocana 等の名があつても矛盾はない。また、Pelliot tibétain No. 1311, 1582に『十万頌般若経』の校閲に Vairocana も関係したという奥書を含む断片があるから、『八千頌般若経』を校閲しても不思議ではないので、この奥書を信用したい。

この奥書には、「校閲して確認したもの」とある。一般に、校閲されるものに奥書があれば、それを先に書き、次に校閲した旨を書くのであるが、この奥書には、それがないので、奥書のないものを校閲したと考えられる。

また、大谷写本は、他の2写本との間に訳語の相違が見られる。二三の例をあげてみよう。[Sanskrit=東洋文庫及び東大寫本の訳語：大谷写本の訳語]。antaśas=tha na: chuñ nu na, Akṣobhya=mi ḥkhrugs pa: mi bskyod pa, sarvena sarvaṃ sarvathā sarvaṃ=thams cad du (nas) thams cad rnam pa thams cad kyi thams cad du: yoñ ye, samprāsaṃ ā-√pat=dñāñ bar-: śin tu dñāñ bar-, ただし、上記の章の中で、東洋文庫写本の第19章には、mi bskyod pa, yoñ ye, śin tu dñāñ bar- も使われているが、これは先に指摘した奥書の付加と同様、転写者の手によるものと見るべきであろう。

以上の奥書の記述の仕方及び訳語の相違という点から見ると、大谷写本は、奥書では「校閲して確認したもの」とは言うものの、実際は東洋文庫及び東大寫本に相当するものの改訂本と思われる。

III. 次に、翻訳年代を問題にするに当り、この改訂年代を検討したい。奥書における、Dharmasīla は、*Lo pañ bkah thañ* (66b1) によると、Khri sroñ lde

brtsan 代にチベットに呼ばれた僧の中に数えられ、Vairocanarakṣita は、チベットにおける初めての出家者、「試みの六人」の一人であり、shañ Śākyaprabha は、shañ には mChims 氏も含まれるから、*mKhas pañi dgañ ston* (103a5) における *rBa bshed che ba* からの引用文において、Khri sroñ lde brtsan 代に Vairocana 等と共に梵語を学んだとされる mChims A nu の子 Śākyaprabha と同一人物で、Bu ston も彼を Padmasambhava を招くために遣わした者の中に入れ、Khri sroñ lde brtsan 代の人物と見ている²⁾。

また、インド人の Dharmasīla は Dharmatāśīla の可能性があり、Dharmatāśīla であれば、Ye śes sde との共訳 (北京, No. 5306) があること、Vairocana も Ye śes sde とともに活躍した Śilendrabodhi 等との共訳 (北京, No. 5606 等) があることから、Khri lde sroñ brtsan 代にも活躍し得る。しかし、Khri lde sroñ brtsan 代の翻訳を含む刊本の大蔵経 (北京・デルゲ) の奥書に、shañ Śākyaprabha の名が見えないから、現在では、shañ Śākyaprabha の Khri lde sroñ brtsan 代における活躍の可能性についての判断は保留せざるを得ない。

従って、三人が共に活躍し得る年代は、khri sroñ lde brtsan 代であること、また、奥書では、三人の他に何人かが加わって改訂を行なったことを示しているが、人数から見て翻訳事業のものと思われることから、この改訂本は、Khri sroñ lde brtsan 代の翻訳事業におけるものと見てよいであろう。

IV. ところで、大谷写本が改訂本であるとすれば、東洋文庫及び東大写本の原本は、それ以前に翻訳されていなければならない。Khri sroñ lde brtsan 代の翻訳事業は、チベットにおける初めてのものであり、そこでは翻訳は必ずインド人と共に行なわれたと思われる。そのような翻訳に、同じ時期に訳語を中心とした改訂が必要であつたであろうか。それよりも、Khri sroñ lde brtsan 代の翻訳事業以前に翻訳が為され、翻訳事業において改訂されたと考える方が自然であろう。そして、この写本の内容の位置づけが、645 年にインドから帰つた玄奘の訳『第四会』以後であることを考えると、翻訳年代は 649 年没の Sroñ btsan sgampo 代では早すぎるので、その後、或る程度仏教が広まつたと言われる Khri lde gtsug brtsan 代、つまり、8 世紀前半と推定されるのである。

1) 拙稿「東洋文庫所蔵・写本チベット訳『八千頌般若経』について」(『印仏研』28-2)。

2) E. Obermiller, *History of Buddhism by Bu-ston*, Hei-delberg, 1931, p. 189.

(北海道大学大学院)